年報筑波社会学　第16号（2004），30～34頁.

《特集：「国際社会学」とは何か》

「拡散する国際社会学」に向けて

五十嵐　泰　正

初めまして、五十嵐泰正と申します。サッカーに喩えて言うならば、私のような若い者を、わざわざアンダー30のカテゴリーから、このような晴れがましい国際社会学の日本代表戦にお呼びいただいたということは、やんちゃなドリブルをして、思い切ったシュートを放てと期待されているのだろうと曲解致しまして、やや破壊的なことをしゃべらせて頂くかもしれません。しかし破壊的であるけれども破滅的ではないように、話させて頂くつもりです。

日本の社会情勢そのものの変化、つまり、1980年代以降に外国人と呼ばれる人たちの存在がますます顕在化してくるなかで、この国際社会学と言われているようなテーマはいま、率直に言って、私たち世代以下の院生のなかでも「流行っている」と言ってもいいでしょう、非常に人気のあるトピックになっているわけです。しかし、国際社会学というものを一つの学問領域として確立していくということに、私は若干の違和感を覚えてもいます。日本社会の中で対象化された移民、外国人という存在を論じていく一つのジャンルとして、国際社会学というものが確立されていくこと、ここに若干の違和感を、私は覚えるわけです。駒井先生も先ほど矮小化という言葉をお使いになっていらっしゃいましたけれども、英語で言うとゲットー化というような言葉にもなってくるかと思うんですね。外国人・移民の研究、あるいはエスニック・マイノリティの研究が、「国際社会学者」と呼ばれるごく一部の研究者の専任領域として確立され、囲い込まれることと裏腹に、一般の社会科学の議論から切り離され、むしろ広範な言説空間における関心事項ではなくなってゆく、というような事態を危惧しているのです。

そういった、社会学における一つのサブジャンルとして外国人・移民の研究があるというような、特定の領域の確立を目指すという形ではなく、エスニシティという切り口が希薄だった、既存の日本の社会科学諸領域における知の体系に介入していく。そういうような形での、拡散する国際社会学というようなものが、これから目指されるべきもう一つの可能性なんじゃないかという風に、日頃から多々感じております。

80年代以降の多文化化する日本社会の状況の中で、「外国人労働者」という言葉が当初から非常にクローズアップされましたように、彼ら／彼女らは、まずもって労働する存在として、日本社会に来た人々、あるいは、日本の産業社会から要請された人々だったわけです。現在「国際社会学」と呼ばれる分野にある、日本社会での実証研究もまた、そうい

った人たちのことを扱っている場合が多いわけですが、言うまでもなく彼らは、この社会で単に労働するだけの存在ではありません。彼らが社会生活を営んでいく中で、労働のみならず教育、ジェンダー、あるいは文化、宗教、スポーツ、地域居住の問題、コミュニティの問題、そういった様々なこと、すべての社会領域に、当然ながら関わっていきます。そういった諸領域に関して、社会学、いや、広く社会科学といってよいと思うんですが、社会諸科学は、これまで様々な関心から膨大な議論を積み重ねてきたわけです。しかし、在日コリアンをはじめとした旧来のエスニック・マイノリティの存在を周縁化し、「単一民族神話」を前提としてきた、それら既存の日本の社会科学の議論に、果たして、エスニシティという問題設定がきちんと備わっていたのかどうかというと、はなはだ疑問です。だとするならば、様々な領域における議論の蓄積を、「外国人労働者」、より広く言えば、外国籍の住民の存在を経由することで、鍛え直していく。彼らの存在自体や抱えている問題を通して、日本のアカデミアや政策過程における知のあり方をもう一度再考し、日本社会の諸制度がどのような暗黙の前提のもとに成り立っていたのか、それがどういう変化を迎えているのか、そういったことをもう一度見つめ直す。そういった形で、国際社会学的な視点というものが拡散し、既存の知の体系に介入していく方向性こそが、現在求められているのではないかと痛感しています。

で、非常に雑駁な一例になりますけれども、いま国際社会学、あるいは移民研究と銘打った、日本国内での実証研究を反映された論集のシリーズみたいなものがたくさん出ていますよね。自分もそういうところに書かせて頂いている身ながら敢えて申し上げますと、そういう「国際社会学」の論集がいくつもできるというだけではなくて、様々な社会学の本それぞれの一章に、必ずエスニシティ、あるいは外国人の視点を含んだ考察があるというような、そういう方向性こそがいま、目指されるべきものなのではないでしょうか。これはちょうど、60年代くらいにフェミニズム、ジェンダー・スタディーズというものが登場し、それらが社会科学において果たしてきた役割と、対比して考えていただければいいかと思います。ジェンダー研究には、一つの領域を確立する、有体に言ってしまえば、大学内での講座や学科を設置する、そういう動きもあったわけですが、それだけではなくて、既存の制度や学問自体の男性中心的な視点を解体し、見直していくために、既存の学問に介入してゆく、そういうドライブも強く備えていたわけです。それと同じように、日本のアカデミアにおける知の体系、そして社会のさまざまな制度そのものが、いかに日本人中心主義的だったのか、別の言い方をすれば、いかにエスニシティ・ブラインドであったかということ、それを各分野で明らかにしていくべく、各分野へと拡散し、介入してゆくことが、国際社会学に求められる大きな課題なのではないかと感じているわけです。

もう少し具体的に論じてみます。例えば、私自身専門外なのであまり詳しいことはわからないのですが、現在新聞紙上を賑わしている年金の問題を考えてみます。梶田先生もご

注目されていますけれども、日本に来ている外国人の中には、トランスナショナルな生き方といいますか、出身国と日本の二国間、さらにはそれに別の渡航先を加えた多国間を移動しながらライフコースを送っているような、新しい生き方というものが、かなり一般化しつつあります。旧来の、移民先に骨を埋めるような意識とは全く異なるそうした生き方が、航空機輸送網と国際通信の加速度的な発達と低価格化の中で、可能になってきているのです。そういう人たちを、年金のような制度に、つまり日本国内に継続的に居住し続けるか、あるいは日本国内で就労し続けるか、ということを前提とした社会保障制度にどう組み込んでいくのか、あるいは組み込みえないというのならば、オルタナティブとしてどのような柔軟な社会保障制度を用意するか。こういった議論というものは、本来はグローバル化時代の社会制度のグランドデザインを語るときに、当然考慮されるべき基礎的な議論のはずなのですが、どうでしょうか。現実には、こうした移動する人々からの視点というものは、国会の論戦にのぼることも、全国紙の紙面で議論をされることもなく、外国人に対する福祉という限定された問題設定の中のみで、「国際社会学者」や「外国人問題」のNPOといった専門家によって語られていくのです。現に、老齢まで日本で働き続けてようやく意味のある厚生年金とセットになっている会社の社会保険に入ることを忌避する日系ブラジル人が多い、というようなことが以前より問題になっていますが、そういったことも、社会保障制度設計全体の問題とはみなされず、あくまでも外国人の社会保障・福祉の問題として縮減されて論じられてきました。そこから一歩抜け出して、トランスナショナルに移動する外国人という存在が引き起こす諸問題を、制度設計全体の視野から見つめることではじめて、日本の、もう少し言えば、近代国民国家の制度が当然の前提としていたことを、逆照射していくこともできるのです。

同様の問題は、ほかにもあります。これまた大きな社会的イシューになっている教育改革の議論には、エスニシティの視点は入ってきているでしょうか。ショッキングな少年犯罪のニュースを前に、「心の教育」の必要性が叫ばれ、道徳教育が安易に愛国心の涵養へと直結されてゆくとき、その授業を受ける外国籍の児童という存在は、視野の片隅にでも入っているでしょうか。外国人子弟の教育の問題を、母語や「国語」の習得といった緊急の問題にだけ切り詰めてしまうのではなく、こうした大きな教育環境の変化の中で捉えていくことも、国際社会学に課せられた課題でしょう。「国語」のみならず、すべてのカリキュラムや生活指導、あるいは学校行事カレンダーといったものが、いかに日本人子弟を暗黙の前提に設計されているのかを問い直し、あらためて自覚化していくことも必要です。

あるいは労働市場や雇用の問題にしてもまたしかりです。ポスト・バブル期の産業構造の変化の中で、パートや派遣社員、契約社員といったいわゆるフレキシブルな労働力が増大していることの危うさは、そこここで論じられています。また、その流れが、日本の階層格差の拡大へつながっていくのではないか、という議論も盛んになされています。現在の外国人労働者という存在は、間違いなく、そうした日本の労働市場や階層構造の変化の

中に位置づけられるべきものなのですが、こういった当然あるべき議論がなかなか開かれていかない。どちらも大きな社会問題カテゴリーになっているはずの、外国人労働者とフリーターの両者をつなげて論じているような議論は、寡聞にして知りません。中小の工場や建設現場を、いわゆるフリーター層と外国人労働者がともに支えているような状況、あるいは、東京のコンビニのバイトに、外国人留学生が多数パートタイム労働者として流入しているような現状を、どう適切に捉えてゆくべきなのか。「外国人労働者」を、個別の問題として、周囲の文脈から切り離して論じるのではなくて、あくまでも日本社会全体の労働市場や雇用の変化を捉えてゆく中で、そのアクターの一つとして外国人がある、というようなスタンスでの議論への転換が、本当に必要とされています。

地域における外国人との共生を考えるときも、同様の視点は要求されます。私自身は、グローバル時代の都市における地域アイデンティティの再編に、ナショナリズムやレイシズムがどう絡んでくるのかという問題関心で、東京の「下町」地域の一角、上野をフィールドに研究を進めております。上野という地域にも、ご多分に漏れず、ニューカマー系の店舗、おもに韓国人と中国人が中心ですが、彼らの飲食店や風俗店、食材店が随分増えてきております。その一方で、ご存知の通り、在日コリアンの方々が、戦後長らく確固とした地歩を築き上げてきた地域でもあるわけですね。そして重要なことは、それらの多文化化現象は、「下町」地域における、東北や上信越からの長年にわたる人と文化の流入と定着の歴史、つまり都市形成そのものの歴史の延長線上で起こっているということです。そういった場所で、ニューカマー外国人の存在を対象化して取り出して、彼らに対する排除や包摂のあり方を論じてもほとんど意味がない。そうではなくて、地域社会におけるある種の共同性というものが生まれていくときに、その裏面として発生する「よそもの」を発見して排除する語りの中に、エスニシティとか人種とかの語彙が、どのように忍び込んでいるのか、密輸されているのかを、解きほぐし、掘り起こしていくという作業が重要になってきます。都市コミュニティにおける外国人排除の語りは、必ずしも人種やエスニシティの語彙が前面に出てくるわけではなく、地域への愛着であるとか、商売のやり方であるとか、単に新参者かどうかであるとか、そういった形をとって現れてくるわことが多いわけです。もちろんそこでは、石井先生もご指摘になっていたように、外国人という存在を一枚岩的に捉えていたのではダメで、都市における階層性というものが、人種・エスニシティよりもむしろ先行する変数として出てくるということでもあります。

私がこの研究で焦点を当てているのはあくまで、グローバル化時代における都市のローカル・アイデンティティとコミュニティの再編課程です。そこには、外国人の存在は抜きがたく刻印されているわけだけれども、それを分析していくときに、人種・エスニシティという軸を、いくつかの変数のひとつとして一旦後景に退かせて考えてみる、という発想が大事なのではないかと認識しています。一見遠回りに見えるこうした方法論をとること

で、実は、「エスニック・スタディーズ」「外国人労働者研究」という形にあくまで固執してやっていくよりもむしろ、人種やらエスニシティやら、そういう言葉で呼ばれるものがこの社会でどのような位相を持っているのかを、よりくっきりと照らし出すことができるのではないかと、このところ私は考えています。一見、問題関心を拡散させ、退いたように見えながら、実は国際社会学といわれる領域の非常に中核的なことを扱いうる可能性に開かれていくのではないかな、と。

最後に、梶田先生の、「世界的な比較研究に耐えうる水準にまで理論・実証の両面を引き上げるべく、国際社会学という領域を確立することがまずは必要とされている」というご指摘に関しまして、基本的には同意いたしますけれども、私自身の一抹の逡巡を申し添えさせていただきたいと思います。

先ほど簡単にお話しました上野における実証研究を、昨年末上海の学術会議で報告する機会に恵まれました。アジア圏を中心に、ヨーロッパや北米からも数多くの著名な都市研究・文化研究の研究者が集まったワークショップだったのですが、英語で語られた上野の話を、なぜかあまりにすんなりと「理解」していただいたことに、ちょっとしたひっかかりを覚えました。今まで、あまりにも好事家的でドメスティックな「下町」語りに閉じ込められてきたあの地域の分析を、グローバル化という全世界規模の議論の中に開いていくという意図は、意義のあるものだったとは思うのですが、それがあまりに簡単に「理解」されたことに、逆に違和感が残りました。世界的によく知られた議論を引用し、グローバル化を語る術語を用いてローカルな社会を分析してゆけば、こういった場で「受ける」、つまり有益な日本発の実証研究をすることは、そう難しいことではないのかもしれません。しかし、私の短時間の報告、しかもそう流暢でない英語で話された報告が、上野という場所をまったく知らない国際的な聴衆に受け入れられてしまったということは、グローバル・シティ論というアカデミックな関心の俎上で、何か強すぎる「物語化」をかけて、そう容易には理解できない、地域の歴史的な水脈の多層性や両義性を切り落としてしまった結果ではないか。逆に言えばその議論は、肝心の上野に持ち帰って商店街の人たちに話したときに全くちんぷんかんぷんになってしまうような、リアリティから遊離したものになっていないだろうか、という疑念が沸き上がってきたのです。

「現場志向」と「理論志向」の関係、実証研究においてどの程度の抽象度を上げるべきなのか、という古典的な逡巡ではありますが、世界水準の国際社会学を日本で確立していこうとする過程で、多くのフィールドワーカーがこうした違和感に囚われることもあるかもしれません。しかし、この違和感もまた、軽視すべきでないように思います。

（いがらし　やすまさ／日本学術振興会）